



CLOSE UP VOICE

豊橋鉄道株式会社(豊鉄グループ)  
代表取締役 小笠原 敏彦 さん

地方鉄道の未来への進路。  
交通ネットワークを駆使し、  
地域の活性化に寄与

創立から100年間にわたり地域の豊かな暮らしに貢献してきた豊橋鉄道株式会社。「市電」の愛称で親しまれている路面電車を、「納涼ビール電車」や「おでんしゃ」といった企画により、付加価値をつけ注目を集めるなど、枠にとらわれない挑戦を続けている。本年3月に100周年を迎えるにあたり、今の想いととも「MaaS」への対応などを中心に未来への進路を伺った。

急激な経営環境の変化にも  
果敢に挑戦

——貴社の事業内容を教えてください。

小笠原▼当社は、鉄道・軌道(路面電車)による旅客運送業をはじめ、不動産・広告業、豊鉄グループとして豊鉄バスの路線バス及び貸切バス事業、豊鉄建設の建設業など東三河を拠点に幅広く事業を展開しております。事業の中核である旅客運送

——貴社の歩みを教えてください。

小笠原▼1924年3月17日に豊橋商業会議所において設立総会が開かれ、路面電車を運営する「豊橋電気軌道株式会社」として創立しました。東三河地域の路線バスの需要拡大に伴い、路線バス事業を開始し、1954年に社名を「豊橋鉄道株式会社」へ変更し、名古屋鉄道株式会社から渥美線を譲り受けたことで豊橋市を中心とする輸送網を確立しました。

1997年に市内線は「豊橋駅総合開発事業」の一環として、全国初となる「路面電車走行空間改築事業」の適用を受けました。2006年には、豊橋市制100周年の節目に合わせ、LRV(低床車両)を導入する計画を発表し、一部停留場のバリアフリー化を実施しました。この車両は一般公募で「ほつトラム」と愛称が決まり、2008年12月19日より運行を開始しました。また、同年6月に渥美線においては新豊橋駅を移設開業しました。

このたび本年3月に創立100周年を迎えます。これもひとえにお客様をはじめ、地域社会の皆様、諸先輩方、従業員、そのほか関係先様のご支援の賜物であり、心より感謝いたしております。

業では、豊橋市内を走る市内線と、豊橋市と田原市をつなぐ渥美線を運行しており、豊鉄バスの路線バス網とともに東三河地域の主要な公共交通ネットワークの役割を担っています。

今後とも安全で快適な暮らしのサポートにとどまらず、地域の皆様に選ばれ、また地域の活性化に貢献するための様々な活動を積極的に実施してまいります。

——交通事業についての重点テーマを教えてください。

小笠原▼東三河エリアを起点とする「MaaS」への対応です。「MaaS」とは、地域住民や旅行者一人ひとりの移動ニーズに対応して複数の公共交通やそれ以外の移動サービス最適に組み合わせ、検索・予約・決済を一括で可能にするサービスを指しているものです。

現在、全国各地でアプリを中心に普及し、交通手段の検索だけでなく、デジタル決済や観光情報の閲覧など幅広いサービスが提供され、利便性が高い一方で、地域の取り組みやより詳しい情報を知りたいと感じる方も多いと認識しています。

そこで、当社グループが目指すのは地域に特化したエリア版「東三河MaaS」です。東三河地域全体の交通を網羅している強みを最大限に活かし、豊橋駅を起点に「目的地と交通を紐づける」ことで地域における移動サービスの最適解を正しく伝え、お客様が円滑に目的地へ行くことができるようになります。

また、「観光事業」への取り組みにも注力したいと考えています。観光は交流人口を増やすため、どの自治体でも重要な政策課題に位置付けて取り組みを行っています。観光と公共交通機関の結びつきは強く、当社グループも課題解決に向けて力強

INTERVIEW



豊橋鉄道株式会社  
豊橋市駅前大通1丁目46-1  
豊鉄ターミナルビル5F  
0532-53-2131

り愛知県が認定する「認知症サポーター養成講座」と「ONEアクション研修」をセットで実施する独自の認知症研修を、豊橋鉄道、豊鉄バスを中心とする従業員に受講させています。認知症への理解を深め、認知症のお客様が訪れたときでも適切に対応し、安全安心に利用していただくよう教育を実施しています。

豊鉄バスでは、使用しなくなったバス停を「バスの来ないバス停」として認知症カフェやグループホームへ寄贈したことをメディアに取り上げていただきました。これは、「認知症の方は、自宅に帰ろうと交通機関を探す傾向にある」という気づきから認知症ケアの一環として始めた取り組みです。認知症カフェからはじまり、今では東三河地域8ヶ所のグループホームへバス停を寄贈させていただきました。交通事業以外でも地域社会のお役に立てればと願っています。

「将来のビジョンを教えてください。」

小笠原 ▼ 豊橋鉄道100年の歴史の中で、戦時中の空襲により路線が破壊された際、約1ヶ月で復旧を果たしたことや、全国的に路面電車が廃線傾向にあるなか、路線延伸を実現できたことなど、東三河の公共交通機関としての使命を果たしてまいりました。これもすべてお客様と自治体の協力があつたからこそだと感謝しております。

しかし、人口減少に伴うお客様の減少並びに人手不足のほか安全安心で快適な運行を実現するための車両の更新などの課題に直面しております。この困難な状況においても我々は一丸となって、地域のニーズを充足し、安全で快適な移動を維持できる最適解の提供を目指したいと考えています。

将来に向けて、これらの課題に対処するためには、地域社会の皆様との協力が一層不可欠です。人口減少が進む中でも、地域の特性やニーズに合わせた運行計画やサービスの提供が求められます。また、技術の進歩を活かした車両の更新や安全対策の強化も重要です。この先の未来も皆様のご理解とご協力を得つつ、使命感とプライドをもって、より良いサービスを実施してまいります。

いサポートを提供すべきだと感じている。東三河MaaSへの対応はその面でも重要な柱になるものです。

しかしながら、交通事業者だけではこの取り組みは実現できません。観光・交通の情報を東三河8市町村の広域で連携し、一体となって取り組むことが重要だと考えます。昨年設立された「(一社)ほの国東三河観光ビューロー」との連携もその一つです。今後もよりお客様のニーズにあった情報の発信に努め、外出の機会をつくり、地域の活性化に寄与できればと考えています。

また、「着地型観光」の強化にも取り組みたいと思っています。東三河は、関東圏と関西圏の間にあり、宿泊地として利用されることが多いと認識しています。コロナ禍が明けた今、この地域の観光資源を基にした観光商品や体験プログラムを企画・運営し、国内外の観光客の受け入れを強化していくべきと考えます。

豊橋市は全国でも数少ない路面電車の走る街として注目いただいております。当社としても地域の方から「市電」の名で親しまれていることから、この街のシンボルであると感じ、市電をこの街の重要な観光資源の一つと考え、東三河地域との観光ツアーとタイアップした取り組みを行っています。

市電を移動手段としてだけでなく、

イベント電車として体験できる取り組みとして「納涼ビール電車」と「おでんしゃ」を運行しています。「納涼ビール電車」は1992年に運動公園開業10周年記念イベントの一環として運行開始以来、豊橋の夏の風物詩として定着しました。「おでんしゃ」も「納涼ビール電車」に次ぐイベント電車として企画され、今ではヤマサちくわ様のおでん、福井酒造様のお酒を楽しんでいただける人気イベントとなりました。

豊鉄バスの「ハニットツアー」では、東三河地域の観光地巡りとイベント電車を組み合わせたツアーを実施しました。その一つとして、大河ドラマで注目を集めた「どうする家康 浜松大河ドラマ館」を巡るツアーと「納涼ビール電車プレミアム」を組み合わせたツアーは大変好評をいただきました。

今後も地域課題や観光として訪れたお客様の移動に対するご要望に答えるため、最適な交通モードの提案や路面電車など特色ある事業を活用したツアーの造成などの内容を充実させてまいります。

使命感とプライドをもって  
地域に根差したサービスを展開。

INTRODUCTION OF GROUP COMPANY

豊鉄グループは、地域の移動を支える運輸を事業の柱に、旅行・建設業等様々な分野で地域に貢献する事業を展開しています。鉄軌道で培った信頼を礎に地域から愛され、必要とされるサービスを創造し続けます。



従業員の健康管理を徹底し、  
安全な運行を維持

交通安全のほか、貴社内で重点的に取り組んでいることはありますか。

小笠原 ▼ とくに重点を置いているのは、従業員に対する健康経営と、認知症への理解と対応です。従業員の健康は、安全で快適な輸送サービスを実現するものであり、経営の基盤であると考えています。以前から安全衛生や労働災害防止、健康保持増進に取り組んでおり、それらをさらに向上させるため2016年から

豊鉄グループ安全衛生委員会を立ち上げ、安全と健康に関する情報共有を図りました。人間ドック受診の推奨と補助のほか、インフルエンザ予防接種、産業医・保健師による健康指導やメンタルヘルスケア、また運輸職に関しては脳ドックなども実施し、心身ともに健康で活気ある職場づくりを推進してまいりました。結果として、2017年から豊橋鉄道、豊鉄バスは共に「健康経営優良法人」に継続認定されています。

次に認知症への理解と対応です。認知症患者が増加している社会課題への対応として、2021年度より

